

ジェイコブ・コールグ 著

ギッシングの生涯と作品（前）

松 岡 光 治 訳

従来、ジョージ・ギッシングはエッセイ集『ヘンリー・ライクロフトの私記』の著者としてしか知られていなかったが、¹ 今ではヴィクトリア朝末期の重要な小説家の一人として高く評価されている。彼の名声は1880年から1903年の間に相次いで書かれた小説によるものだが、その大半は当時の産業社会における不正の数々をリアリスティックに暴き出した作品である。都市における貧困の情景が頻繁に描かれた初期の作品群を読むと、彼はスラム街の小説家ではないかという印象を受ける。しかし、彼は作家活動の後半において小説の舞台を中流階級に変更し、作家として成熟した技量を駆使して普通の社会を全体的に批判するようになった。ギッシングは個人の生活と公的な問題とを結び付け、傷つきやすい若者が社会の力によって犠牲となる様子を独自の才能で描いてみせた。こうしたアプローチによって彼は、貧困、女性の社会的制約、結婚問題、現代文明の卑俗性、文学の商業化といったテーマを論じたのである。

ギッシングは宗教については不可知論者、社会改革については懐疑論者であった。小説で扱う問題に対しては、いつも反大衆的、悲観的、そして宿命論的とさえ思える立場をとった。芸術や学問に象徴される人間の高尚な能力は、民主的な社会における金銭欲や大衆文化に埋もれてしまわざるを得ない。彼は心の中でそう思っていた。19世紀末期を病んだ状態にしていた社会問題がギッシングに与えたものは、激情や迷信を排した、教養を基盤とする文明が生まれる見込みはないということを示すための材料であった。社会状況を観察して強い不満を覚えていたからこそ、彼は苦境に陥った当時の人々の心を洞察する類まれな力を養うことができたのである。

ジョージ・ギッシングは地方の中流階級の出身である。父はヨークシャー州の町、ウェイクフィールドの中心街に薬剤師として店を構え、その上の階に住んでいた。² ギッシングは長男で、下には4人の弟妹たちがいた。³ 彼は地方の学校に通っていたが、⁴ 13歳の時に父が死ぬと、⁵ チェシャー州のリンドウ・グロウヴ・スクールへ行かされた。⁶ そして、その2年後にはマンチェスターのオーエンズ・カレッジに入学することになる。⁷ 彼の文学趣味は在学中に鮮明な形をとるようになった。子供の時に詩を書いたこともある彼は、学校で古代と現代の言語と文学を学んだが、この時期に彼はギリシャとローマの文化についての知識を得たのである。そして、それが彼の一生の関心事となり、楽しみの最も深い源泉となる。彼は熱心に勉強する学生で、先生からは高い評価を受け、数

多くの賞や奨学金を獲得するなど素晴らしい記録を達成していた。資格を取得した後はオックスフォードかケンブリッジに進み、おそらく学問をずっと続けるだろうと思われていた。

しかし、そうした経歴は彼がオーエンズ・カレッジの最終学年を迎えた18歳の時、すなわち1876年の春に生じたショッキングな事件によって途切れてしまう。彼は「ネル」と呼ばれていた17歳の娘と恋に落ちていたが、この娘は貧しくて家族もなく、よくカレッジ近くのパブなどに行っては、自活のために春を売ることがあった。⁸ 彼女が街の女にならず正直に働いて暮らせるようにしようとするあまり、ギッシングはカレッジのロッカー室から書籍、金、衣類を盗むという切羽つまった方策に出た。⁹ それで、逮捕されて放校処分となり、1ヶ月の監禁と共に重労働を課されることになった。釈放された後、彼は恥辱を受けた場所から逃れるために、1876年9月になってアメリカへと渡ることになる。¹⁰ この事件はギッシングの人格と作品に甚大な影響を及ぼした。彼は学術的な人生を歩む可能性を断たれ、社会から追放された人間としての生活を余儀なくされ、自らをアウトサイダーとして見るようになったのである。更に重要なことに、普通の道德基準に対する弁護の余地がない違反行為によって罪の意識が生まれ、それが彼の自滅的な行動と絶望的な人生観を形成する原因の1つとなった。

ギッシングのアメリカ生活は1年あまり続いた。それは心が休まることのない国外追放の時期であったが、逆説的に言えば彼がささやかながらも最初に文学的成功を収めた時期でもあった。ボストンで1ヶ月を過ごし、そこで地方の定期刊行物に生まれて初めての記事——美術館で見た何枚かの絵画についての記事——を出した後、¹¹ 彼はマサチューセッツ州のウォルサムに移り、高校教師の地位を得てフランス語、ドイツ語、英語を教えた。¹² 1877年3月、彼は突如としてシカゴに移ることになる。¹³ そこで金に窮した彼は多くの短篇小説を書き、なんとか『シカゴ・トリビューン』やその他の定期刊行物に買い取ってもらった。¹⁴ これはギッシングにとって文字どおり小説家としての第一歩であった。このことやこれに続くエピソードについては『新グラブ街』に詳しいが、¹⁵ この小説ではギッシングのアメリカでの体験がフェルブデイルという人物にあてがわれている。7月になると彼はニューヨーク・シティに移動する。そして、トロイの新聞社が彼の物語の1つを無断で掲載したことを知り、そこへ行けば雇ってもらって更に書けるだろうと思った。¹⁶ しかし、彼は無残にも追い返され、旅の写真屋のアシスタントとして数ヶ月ニューイングランドを放浪した後、9月になってイングランドへ帰国することになる。¹⁷

ギッシングはロンドンで安い下宿を渡り歩いたが、まもなくそこへネルが加わったので、1879年に彼は彼女と結婚した。¹⁸ この時期のことは『ヘンリー・ライクロフトの私記』に描かれている。その日暮しの貧困状態にあった彼は、時たま見つかる家庭教師の

仕事や他の不定期な仕事で生活しながら、真剣に小説の創作に励んでいた。結局、この最初の小説の原稿を出版してくれる業者は見つからなかった。それで彼は別の小説を書いたが、またもや出版拒否の憂き目にあっただけであった。1880年、この二番目の努力の結晶を、彼は『暁の労働者たち』というタイトルで、¹⁹ 父から譲り受けた遺産を使って自費出版することになる。この本はほとんど売れなかったし、注目を浴びることもなかったが、その1冊を彼は実証哲学協会のフレデリック・ハリソンに献本していた。²⁰ この頃のギッシングはコントとその実証哲学に熱中し、²¹ ハリソンの論文を熱心に読んでいたのである。『暁の労働者たち』のヒロインは、伝統的なキリスト教の信仰に代わるものの1つとして、実証哲学に救いを求める人物なので、このような側面にハリソンが興味を覚えるかもしれないとギッシングは思ったに違いない。実際、ハリソンは作品のアイデアに異を唱えたものの、強い印象を受けて賞賛の手紙を寄越してきた。ハリソンはまたギッシングをジョン・モーリーやその他の文人たちに紹介し、²² 二人の息子のために彼を家庭教師として雇ってくれた。

『暁の労働者たち』は社会に対する抗議の書である。事件、登場人物、きわどい場面などが多すぎ、まとまりがなくて軽妙さに欠けるものの、それでも貧困の描写は作者の強烈な憤りを伝えているし、彼が社会改革に関する当時の最新理論の幾つかを知的にしっかりと理解していることはよく分かる。ギッシングは自分の経験を活用し、ロンドンのスラム街で生まれた若者、アーサー・ゴールディングの身の上話をするが、この若者は画家になりたい気持ちと労働者仲間のために政治活動に献身したい気持ちとの板ばさみになる。酒に溺れた若い街の女、キャリー・ミッチェルを救って更生させるために彼がしてやった結婚は、明らかにギッシング自身が結婚した状況を反映したものである。ネルはアルコール中毒者であったし、彼女の体の病氣、落ち着きのなさ、反抗的態度のせいで、ギッシングの生活は見るも無惨なものであった。これらの苦しみを利用し、彼女を小説の最も力強い場面の中心に据えたのは、作者の特性をはっきりと示している。やがてゴールディングは中流階級の娘、ヘレン・ノーマンに恋するようになるが、彼女は芸術と政治それぞれの目的が互いに両立し得ることを彼に悟らせる。小説では貧者が抱える問題への解決策が数多く検討されるが、どれも役に立たないように思える。結局、またもギッシングの生涯を順番にたどるように、ゴールディングは最終章でアメリカに渡り、しばらくしてナイアガラ滝に身を投げて自殺することで、物語は終わりを告げる。のちにギッシングが認めたように、この小説の形式はリアリスティックな描写、入り組んだ心理分析、作者の注釈、多数のプロットなどの点で、ジョージ・エリオットの小説を模倣したものにすぎなかった。

『暁の労働者たち』の失敗にもかかわらず、ギッシングがハリソンを通して知り合った人々は、彼にジャーナリストとしての仕事を提供してくれたので、その前途は洋々た

るものに思えた。しかし、彼はそうした機会の大半を捨て、家庭教師で糊口をしのぐことで、安い下宿で精力的に小説を書き続けながら、蜚雪の作家としての生活に拘泥した。一緒に下宿していた妻はスラム街の近所で揉め事をしばしば起こしたが、こういった妻の行状を含めて彼には闘わねばならないハンディキャップが数多くあった。しかしながら、この時期に彼の一生に及ぶ交友関係が2つ形成された。1つは、1884年にドイツへ帰国してから作家となり、ギッシングが死ぬまで文通をしてくれた亡命中の社会主義者、エデュアルト・ベルツとの関係である。²³ もう1つは、オーエンズ・カレッジ時代からの学友、モーリー・ロバーツとの関係で、²⁴ 彼もまた小説家となり、のちにギッシングを小説化した伝記『ヘンリー・メイトランドの私生活』を書くことになる。²⁵

1882年頃、ギッシングはもはやネルと一緒に生活することはできないと思い、定期的に手当を少し与えることによって、彼女を他所で生活させるようになっていた。²⁶ この時期に様々な苦勞を味わったにもかかわらず、彼は幾つかの短篇小説と中篇の物語を書いていた。どれも出版まで漕ぎ着けることはできなかったが、とうとう幸運なことに彼の小説『無階級の人々』が、²⁷ チャップマン・アンド・ホール社の原稿閲読者、ジョージ・メレディスに評価された。²⁸ メレディスはギッシングの独創的ではあるが判然としない物語の長所を読み取ってくれたのである。そして、彼に忠告して幾つかの修正を施させ、1884年2月に小説の出版許可を与えた。

売れなかったとはいえ多くの作品を書くことで、明らかに幾らか上達していたギッシングは、『暁の労働者たち』には見出せない制御されたまとまりを『無階級の人々』で見せるようになっていた。限度を設けてテーマと登場人物の数を減らし、社会への抗議をじかに表現するのではなく、物語の一部として組み入れながらハッピー・エンディングに到達している。主人公のオズモンド・ウェイマーク——ロンドンのスラム街に住む貧乏な若い知識人で、作者の社会理論と芸術に関する考えを共有し、容姿も作者によく似た売れない小説家——は、ギッシングが描いた中で最も彼の自叙伝にふさわしい人物である。ウェイマークはまたギッシングの性的なジレンマを受け継いでいる。つまり、中流階級の立派な女性、モード・エンダビーとできれば結婚したいと考えている一方で、(ネルを理想化した人物であることは間違いないが)とても実在するとは思えない聡明かつ利他的な街の女、アイダ・スターにも惹かれているのである。ギッシングはウェイマークと彼の友人たちを通して、彼のように才能ある若者に適当な機会を与えない当時の競争社会を攻撃している。物語が進むにつれ、最初は理想主義者だったウェイマークは、スラム街とそこに住む人々が救いがたいことを思い知り、芸術は私情を離れて客観的になるべきだという見解に変わる。そして、「困窮は現代生活の基調である」(第20章)という理由で、芸術は困窮の代弁者でなければならないと主張する。とはいえ、この小説は楽観的な結末を迎える。アイダ・スターは濡れ衣を着せられて監禁された後、スラム

街を所有する裕福な人の孫娘であったことが判明し、その人の財産を相続する。そして、貧者に施しをする慈善家となり、彼女に助けを求めるウェイマークを受け入れてやる。

これら初期の作品群でギッシングは貧困を排撃しているが、逆に貧者自身に対しても相当な敵意を表明している。彼はロンドンに住み始めて数年の間に自らが受けた幻滅を社会観察者として記録していた。最初は理想を追うように貧しい人々を描いていたが、芸術、学問、古代文明を愛する自分の心を労働者たちに共有させることはできないと間もなく思うようになった。労働者たちはスラム街で身に着けた生活様式をどうしても続けようとしたからである。それゆえ、彼は社会批評家としてのスタンスを変え始めた。今では貧困を読者の目にさすことへの興味が薄れ、スラム街の粗暴さと中流階級の無教養さの両方から生まれる脅威に対して、知性に基づく価値観を擁護することに関心を覚えるようになったのである。そして、自分が本当に扱うべき主題は無産階級の人々ではなく、産業社会での競争にふさわしい知識を備えていない聡明な若者であることを悟るようになる。数年後、彼はモーリー・ロバーツに手紙を書き、「私の作品で最も特徴的な、最も重要な部分は、私たちの時代に特有の——十分な教育を受けて育ちもいい、しかし金がない——階級の若者たちを扱っている部分なのです」と語っている。²⁹

1884年頃にはギッシングの収入も増え、彼の最初の定まった家となるアパートをリージェンツ・パーク近くに賃貸できるほどになっていた。³⁰ 彼は家庭教師をしていた裕福な人々の田舎の屋敷へ行くたびに、どういう環境が教養に基づく価値観に適しているかということが分かるようになった。この後に執筆された小説群は、そうした種類の場面設定に基づき、貧困と特権それぞれの世界の相互作用を中心に展開している。ギッシングは若者たちが結婚して地主階級に入ることによって都会生活から逃れようとする物語を3つ書いた。『イザベル・クラレンドン』は、³¹ ロンドンの喧騒を逃れて田舎の小さな家に慰安を求め、近所に大邸宅を所有している裕福な若い未亡人に恋する文学青年の物語である。しかし、結婚によって精神的な生活という理想を成し遂げることなく、彼は挫折を味わって商売の道へ進み、本屋として生計を立てねばならなくなる。『人生の夜明け』では、³² 貧乏な若い女家庭教師が金持ちの子供たちを世話することで、ギッシング自身と同じように田園生活の甘美さを発見するようになる。彼女は狭い家の生活から離れ、設備の整った趣きのある大邸宅の整然とした環境に身を置く時、喜びと心の落ち着きを感じる。結局、彼女と家庭教師先の息子との婚約は妨害されることになるが、それは彼女の父が犯した窃盗の罪をばらすぞと脅すことで、父の雇主が彼女を無理に結婚させようとしたからである。彼女の父は世間の悪評というプレッシャーに耐えられずに自殺する。その結果、ヒロインは結婚することができず、6年後たまたま昔の恋人と再会するまでは、切望していた自己修養の生活を始めることもできなくなる。

『人生の夜明け』は1885年に完成したが、1888年までは出版されなかった。しかしな

がら、その頃までにギッシングは他に3つの小説を書いて出版していた。その最初の小説『民衆』は、³³ 人間を墮落させる悪影響が下層階級の生活の中にあることを大胆に論じており、続いてそうした議論の社会的、道徳的、政治的な意味が暗示されている。聡明で若い社会主義の指導者、リチャード・ミューティマーは財産を相続し、自分が所有する工場を社会主義的な生産方法に切り替え、結婚によってより高い社会階級に属ようになる。しかし、彼は下層階級出身という負い目によって生まれる性格的欠陥を克服することができず、妻の愛を引き留めることも、社会主義運動をコントロールし続けることも、作品のプロットによって自分がさらされる道徳的試練を乗り越えることもできない。新しく発見された遺書によって彼は財産を奪われ、貧困に陥った挙句の果てに、暴徒と化した自分の追従者たちが投げた石に当たって死んでしまう。小説の終わりでは、彼の工場によって神聖を汚されていた田舎の景色が、再び以前の美しさと静けさを取り戻す。

おそらく『民衆』はギッシングが自分の才能に対する全幅の信頼を示した最初の小説である。彼はリアリスティックな描写、心理分析、雰囲気と趣きの設定を含めた広範囲に及ぶ技術を駆使し、多種多様な場面と人物を十分に発展させた。ロンドンに住む貧民の生活に関する記述は非常に詳しくて信頼性があり、そこでは少なからぬ同情が表明されている。実際の観察に基づく社会主義者の集まりについての描写は活気と生彩に富む。この小説は全体として政治的な陳述を（多少は常軌を逸しているにせよ）力強く行っている。そして、教養に基づく価値観の保護と芸術至上主義についての貴族的な考えに賛同している。ストーリーと人物描写の本質的な力強さ、そして最新の社会問題に関する論じ方ゆえに、『民衆』は一般読者だけでなく批評家に対しても目覚ましい成功を収めた。匿名で出版されたにもかかわらず、すぐにギッシングの作品であることが知れ渡り、彼は当時の文学界で真剣に取り上げられるべき小説家としての地位を確立した。

メレディスはギッシングに「下層生活の場面」を切り捨てないように忠告していたが、³⁴ この題材を『民衆』で扱って成功したことで、ギッシングはメレディスの言うことが正しかったと確信したに違いない。というのは、彼の次の小説『サーザ』は、³⁵ その舞台の大部分がロンドンの貧しい地区であり、そこでは労働者たちの生活について洞察と理解に満ちた描写がなされているからである。ヒロインは理想化された労働者の娘で説得力に欠けるが、彼女を愛する男——本に熱中する工場労働者で、単調な労働の生活から自分が決して逃れられないことを知っている——ギルバート・グレイルは、ギッシングが描いた中で最も本物に近い、最も哀れを誘う人物の一人である。一方、男性の主人公ウォルター・エグレメントは、教養と啓蒙運動を広めるためにスラム街に来てヒロインを恋するようになる地主階級の一員で、この小説の主題は彼の体験の中に具現化されている。ギッシングの初期の小説に見られたように、階級間の境界を越えた愛は破滅する

運命にある。貧乏人は救済できないこと、サーザと結婚するのは間違いだということ、つまり社会のそれぞれの階層は他と交わず、自分の階級の流儀に従うべきだということにエグレメントは気づくようになる。小説の終わりで、彼は自分と同じ階級の娘との結婚を決意するが、彼が捨てざるを得なかったサーザの方は悲嘆に暮れて死んでしまう。

ギッシングがペースを崩さずに仕事をする非凡な人であったことは彼自身の日記で理解できる。1つの小説を完成するとすぐに新しい小説に着手し、作品の計画を練るか、実際に書き進めるか、そのどちらかを必ず毎日していたのである。しかし、彼は執筆の動機不足、決断力のなさ、自信の欠如で苦しんでいた。ある案から別の案へ変更したり、書き上げた多くの章を破棄したり、完成した本を公にしない場合さえ頻繁にあった。1887年に『サーザ』を仕上げた後も、決断力のなさゆえに特に苦しんだ試練の時があった。いつものように彼は着々と書き続け、次の14ヶ月の間に4つの小説を完成、またはほとんど完成したのだったが、その期間に書かれたものは結局どれも出版されることがなかった。この時期のフラストレーションは、1888年2月29日にネルが死んだという通知を受けると同時に、終わりを告げることになる。³⁶ 葬式の準備に行くと、彼は彼女が凄まじい貧困生活を送っていたことを知った。彼女が住んでいた汚い部屋に横たわった遺体を見た時、彼はロンドンでの青春時代に体験した、あの社会的な不公平に対する憤りと絶望が再びよみがえってくるのを感じた。その後すぐに、彼は貧困を扱った最後の、最も悲観的な小説を書き上げることになる。

この小説『ネザー・ワールド』に貧富のコントラストは見られない。³⁷ これはスラム街の生活についてのイメージを単調に積み上げた作品で、幾つかの貧困の段階がはっきりと示されているが、最終的に受ける印象は人を押しつぶすような絶望感である。貧しい人々は仕事探しによって、犯罪によって、政治運動によって自分たちの窮状から逃れようとし、無関係な人々は慈善と教育によって手助けをしようとする。しかし、スラム街で育まれる悪しき性格は根絶できないし、そういった人々は飲酒、暴力、残虐行為、不正行為によって自らの環境を地獄のようにしてしまう。勇気と力を出して苦闘する人物たちは、そうしたスラム街を支配する悪の力にかき消されてしまう。この小説をギッシングは強力な動機に支えられて書いたのだが、最初に小説を書き始めた若い頃のように、自分の感情を耳障りな抗議と共に表出するのではなく、それを文学作品の創作面の方へ向けることで、洗練された新たな素養を見せることができるようになっていた。スラム街の情景とそこに住む人々が、忍耐強い観察による正確な筆致で活写され、環境と経験の人格に及ぼす影響が論理的に述べられ、下層階級の生活水準が数多くの雄弁な描写を通してはっきりと示されている。

1888年9月26日、過去8年に及んで途切れることなく仕事をしてきたギッシングは休暇を取り、多年の願望を遂げて5ヶ月の大陸旅行に出かけた。彼の伴をすることに決め

ていた無愛想な知人と一緒にパリで1ヶ月を過ごした後、彼は一人でナポリ、ローマ、フィレンツェ、ヴェニスを旅した。³⁸ ギッシングがイタリアに心を惹かれた主な理由は、古代ローマと関連のある遺跡や廃墟にあった。彼はルネッサンスの芸術や建築に敬意を払っていたが、そうしたものはローマの名所旧跡に比べると意味がないと主張している。とはいえ、彼はまた旅行した当時のイタリア人の生活を楽しんで観察し、街の人々の活動や日々の行動について事細かく日記に書いていた。

このイタリア訪問は彼の作品に対して即座に影響を及ぼした。彼は次の小説『因襲にとらわれない人々』でイタリアの情景を幾つか利用したが、³⁹ 旅行の結果として更に重要なのは、彼の作家人生における主要な2つの時期が画然と区分されたことである。この旅を終えてからのギッシングは、その時まで彼の主たる強力な武器となっていた貧困についてのリアリスティックな描写を捨て、中流階級の生活を扱う小説へと転向した。まだ社会情勢には関心があったものの、産業化が進んだ民主的な社会の諸問題に直面していた中流階級の人々について、その心理分析に焦点を定めるようになっていた。それと平行して彼の文体にも変化が現われた。貧困を描く際に付随して生じる激しい憤りと無言の絶望感を反映した文体を捨て、無色透明なリアリズムという控え目で客観的な文体を創り出したのである。この文体は平坦な陳述から穏やかな皮肉まで多岐に及び、社会批評の痛烈な媒体として役に立ち得るものであった。『因襲にとらわれない人々』は、イタリアを旅行できるほど裕福で、道徳や美や宗教における伝統的な規範に対して、様々な方法で反抗する人々を取り上げている。中心人物の一人は福音主義派の狭い社会出身の若い未亡人で、イタリアでの文化的な経験によって美的感覚や愛に対して心を開くようになる。これと左右対称をなす人物としては、十分な教育を受けて自分の好きな時に自由に結婚する「伝統にとらわれない」若い女性がいるが、この自由を彼女は無分別に行使してしまう。このような女性の二分法はギッシングの小説でますます顕著になりつつあったテーマ、すなわち女性の社会的地位という問題を提起している。

このテーマを彼は次の小説で扱うつもりだったと思われる。なぜならば、『因襲にとらわれない人々』の完成後、彼は「女校長」という物語の計画を立て、⁴⁰ 大英博物館で女性に関する文献を読んでいたからである。1889年11月11日、その物語を完成する前に彼はロンドンを発ち、二度目の地中海旅行に出かけてしまった。今回は最初にギリシャへ行き、アテネで1ヶ月ほど過ごしてからナポリを再訪し、そこに翌年2月20日まで滞在した。彼がナポリにいる間に、結果的に彼の死因となる肺病の兆候が初めて出たので、下宿のベッドで1週間ほど過ごさねばならなかった。1890年の3月初旬にロンドンへ戻った後、直ちに彼が創作を始めたのは「女校長」ではなく、最終的に『新クラブ街』というタイトルになる小説であった。しかし、彼は何ヶ月も筆を進めることができず、ある案から別の案へ変更したり、何ページも破棄したりする有様で、日記には「絶望」

や「精神錯乱」さえ感じることもあると書いている。⁴¹ 彼はいつも孤立した生活に慣れていたが、孤独感でひどく苦しむことがあった。不幸な気持ちが激しくなるあまり、手際よく仕事ができないことがあったのである。小説だけでなく手紙の中でも、彼はしばしば自分自身の問題について、教養があっても貧乏な男は自分と同じような女性が貧困を共にしてくれるなどと期待すべきでないと語っている。⁴² そうした見解は結婚についての彼の考えを特徴づけている。それゆえ、フラストレーションを解消させようと決心した彼は、最初に出会った女性に——あとで彼が認めたように——結婚を申し込んでしまった。これが無産階級出身の見苦しくはないが無知な娘、イーディス・アンダーウッドである。⁴³ ギッシングは彼女が従順な女となって彼の習慣に順応してくれるだろうと思ったのだが、これ以上の思い過ぎしはなかった。やがて彼女は性悪で、無能で、凶暴な女、つまり彼が忌み嫌った労働者たちの性質をすべて兼ね備えたカメオ細工であることが判明する。

当初、イーディスとの関係は好ましい結果を彼にもたらした。彼女と出会って1週間後、彼の小説を書く筆が急に進み始め、『新グラブ街』というタイトルさえ決まった。書き始めてから数ヶ月間のあたふたとした無益な努力とは対照的に、この小説を彼は2週間ちょっとで仕上げたのである。このように猛スピードで書かれた本は、彼自身の経験に密着して創作されたもので、この上なく強固な個人的確信も幾らか表現されていて、一般に彼の一番すばらしい小説だと見なされている。小説家について書かれた本は、サッカレイの『ペンデニス』やディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』など以前にもあったが、⁴⁴ 『新グラブ街』は職業としての作家の問題を虚心坦懐に語った最初の小説であった。この作品は文学市場の競争に生き残れない、そして中産階級の結婚で要求されることを満たせない小説家を描いており、金銭づくの現代社会がいかに文学と社会生活を墮落させているかを暴き出している。主人公のエドウィン・リアドンが自分は小説を書き続けることができないと思っても、彼の妻は出版者が受け入れてくれそうなものを創作するように忠告する。「今は商売の時代なのだから、芸術活動は商売として行なわなくては」(第4章)と彼の妻は言う。しかし、リアドンはそうした時代に適応することができず、自分は小説家であるという主張をやめざるを得ない。それで、事務員の勤め口を見つけて粗末な下宿に引っ越すのだが、妻は彼と一緒に貧困生活を送ることを拒む。⁴⁵ 皮肉な結末として彼女は、リアドンが死んだ後、彼をいつも賞賛していたのに文学活動を商売として出世した進取的なジャーナリストと結婚する。リアドンの欲求不満、貧困への恐怖、無力感は特に詳しく提示されているが、その多くがギッシング自身の体験から来ていることは間違いない。詳細な事柄をリアリスティックに把握しているからこそ、彼はロンドンで働く作家たちの全体像を概略することができたのであり、その中心を大英博物館の読書室に据え、実に様々なタイプの作家を描くことができたので

ある。⁴⁶ こういった人物たちの信憑性については広く認められている。ある書評家は「私自身、彼らのような人間をすべて知っている。ギッシング氏の描く人物の迫真性には身震いがするほどだ」と言っている。⁴⁷

しかしながら、『新グラブ街』は文学の商業化を単に嘆いたものではない。それは文学趣味の大衆化と大量出版によって文学を商品化する産業界の慣例とを非難し、似たような影響力が愛、結婚、家庭生活において人間関係をいかに歪めているかを明らかにしている。登場人物たちは文学の保全を計ろうとする時だけでなく、道徳的あるいは精神的な葛藤を覚える時もまた敗北を喫する。ロンドンの文学界は、芸術、愛、そして理想主義全般にとって好ましくない運命が、そうした人物たちを破滅に導くための舞台にすぎない。当時の書評家たちの中には、『新グラブ街』で描写される悪が誇張されていると不平を鳴らし、読者を圧倒するような悲観主義を嘆く者が多かった。しかし、その巧みなりアリズム、そしてギッシングが登場人物たちの人生に立ち入る際に示す同情心には着目した。ギッシングの死後、この小説は彼の傑作として認められるようになり、何度も版を重ねている。そして、批評家の意見では彼の作品で抜きん出た存在となっている。「ギッシングの書物の中で『新グラブ街』だけが古典として、また変わらぬ価値と権威を持つ作品として生き残っている」とアーヴィング・ハウは評した。⁴⁸ 現代の批評家たちからは、大衆文化の有害な影響を見抜く透徹した洞察の点だけでなく、ギッシングが個人的な憤りを印象に残る、まことしやかな人生観に書き換えた点においても、高い評価を得ている。

訳 注

- 1 George Robert Gissing, *The Private Papers of Henry Ryecroft*. London: Constable, 1903.
- 2 ウェイクフィールド (Wakefield) はイングランド北部の都市リーズの南16キロにある大聖堂の町。現在の人口は約7.5万で、バラ戦争の古戦場として有名。父 (Thomas Waller Gissing) は植物学の知識があり、地方の植物を調査して出版した書物も何冊ある。彼は多くの蔵書——ギッシングが読破した最初の本は当時の流行作家ディケンズの『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*, 1840-41)——を持っていて、教養を志向する点において息子に大きな影響を及ぼした。一方、教養がなかった母 (*née* Margaret Bedford) は信心深いだけで息子を愛撫することもなかった。この愛情に欠ける母をギッシングは嫌って避けていたので、彼女に関する資料はほとんど残っていない。生家は Westgate 駅の南端から東北東へ走るウェストゲイト通り60番地 (当時は30番地) に現在も残っている。その家は奥に長細い奇妙な形をしたレンガ造りの3階建てで、父は通りに面した1階で薬局を営んでいた。住居の方の玄関は、この建物 (今は向かって右側にある National Westminster Bank の所有) の左側から始まる路地 (Thompson's Yard) に面している。現在、その住居はギッシング関係の資料を展示するセンター (The Gissing Centre

<<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/gg-centre.html>>）として使われている。

- 3 ギッシングが生まれたのは1857年11月22日（日曜日）。弟たちは、20歳で死んだ1859年生まれの William と、弁護士としても小説家としても成功しなかった1860年生まれの Algernon。妹たちはギッシングより6歳年下の Margaret と10歳年下の Ellen。ギッシングは弟たちと頻繁に文通していた以外、肉親とも親戚とも疎遠であった。
- 4 この学校はウェストゲイト通りの北側に平行して走る Back Lane にあったが、今は残っていない。
- 5 父の死（1870年12月28日）の原因は肺充血であった。これは33年後にギッシングが死んだ時（奇しくも同じ12月28日）と同じ原因である。母とは共通点がなく、幼すぎた弟妹たちは知的な話し相手になれなかったため、父の死後はギッシングの生活に孤独と不幸の影が射すようになった。
- 6 ギッシングが二人の弟と一緒に入学した学校（Lindow Grove School）はクエーカー教徒の寄宿学校で、マンチェスターから南へ約20キロ、ギアスケルが幼少時を過ごした Knutsford から東に約9キロの町（Alderley Edge）にあり、教育水準も高かった。現在、この学校はアーサー王伝説の魔法使いの預言者との関係で、「ザ・マーリン」（The Merlin, 5-9 Wilmslow Road）という名前を持つホテル兼レストランになっている。学校時代のギッシングは勉学を続けるための奨学金取得に向けて睡眠を5時間半に定め、食事の時も散歩の時も本を読んでいた。1872年5月にオックスフォード大学の地方試験に合格したことで、オーエンズ・カレッジにおける3年間の授業料免除を受け、翌年1月には大学入学資格試験にも合格した。
- 7 このカレッジはマンチェスターの綿布商人（John Owens, 1790-1846）による約10万ポンドの寄付で1852年に設立された無宗派学校。中等教育と大学教育の橋渡しをする機関で、現在のマンチェスター大学の前身。最初の2年間、ギッシングはオールダリー・エッジに寄宿したまま通学し、3年目にマンチェスターで一人暮らしを始めた。
- 8 一人暮らしと勉学中心の生活による孤独が街の女（Marianne Helen Harrison）に恋するようになった原因である。1876年2月に淋病を患ったにもかかわらず、ギッシングはネルを社会の犠牲者と考え、お針子として更正させるためにミシンを買い与えたり、父の形見であった時計を売ったりした。しかしながら、彼女は飲酒癖があつて金のために売春をやめることができなかった。
- 9 1876年5月31日、ギッシングは張り込み中の刑事に逮捕され、6月6日に有罪の判決を受け、1874年から翌年にかけて必死に準備して合格していたロンドン大学入学の許可も取り消されてしまった。
- 10 釈放後、ギッシングは故郷のウェイクフィールドに帰ったが、黒羊は新天地アメリカへという当時の慣習に従い、オーエンズ・カレッジでカンパされた金によって、リヴァプール港からボストンへ船出した。
- 11 ボストンの新聞（*Commonwealth*）の1876年10月28日版に、“‘ Elaine ’ Rosenthal and Tojetti”という絵画に関するギッシングの批評文が掲載された（*Collected Letters* 1: 53）。
- 12 ウォルサム（Waltham）はボストンの西郊外にある人口6万弱の市で、Brandeis University（1948年創立）の所在地。ギッシングが臨時雇いの教師をした Waltham High School（1869年創立）は、幹線の Boston Post Road から南に走る School Street にあったが、1933年に取り壊された。
- 13 3月1日、ギッシングは何も言わずに学校をやめたが、その理由についてクスティーリヤス（Pierre Coustillas）は、ネルから帰国を願う手紙をもらっていたギッシングが、1歳年下の女学生

- (Martha Barnes)と深い仲になることに對して良心の呵責を感じたからだと述べている。
- 14 ギッシングが2日で書き上げて18ドルを得た最初の小説は、1877年3月10日版の『シカゴ・トリビューン』(*Chicago Tribune*)に載った短篇「父の罪」(“The Sins of the Fathers”)。冒頭部分には貧困に関するギッシング特有の描写が既に見られる。
 - 15 *New Grub Street: A Novel*. 3 vols. London: Smith, Elder, 1891.
 - 16 無断掲載された作品は「父の罪」。トロイ(Troy)はニューヨーク州東部オールバニー(Albany)の北東にあるハドソン川の東岸の市(人口54万)。『新グラブ街』のフェルプデイルの話(第28章)によれば、トロイで金に窮したギッシングは数日間をピーナッツだけで食いつないだようである。
 - 17 ボストンから船に乗ったギッシングがリヴァプール港に着いたのは10月3日。6週間ほどウェイクフィールドに里帰りしたが、作家として身を立てるために直ちにロンドンへ上京した。
 - 18 上京したギッシングは最初 Gray's Inn Road 近くに家具付きの部屋を借りた。1877年の終わりには Tottenham Court Road はずれの下宿に移っているが、これはロンドンにきたネルと一緒に住むためであった。この後、ギッシングは何度も引っ越したが、それは行く先々で繰り返されるネルの売春と喧嘩のせいであった。1878年9月、大英博物館の西(Gower Place)に住んでいた彼は、11月22日の誕生日に21歳の成年に達すると、父の信託財産を受け取る資格ができ、翌1879年4月に300ポンドを得た。彼がリージェンツ・パークの東にある Hampstead Road の聖ジェイムズ教会でネルと正式に結婚したのは同年10月27日(月曜日)で、『暁の労働者たち』が完成した数日後のことであった。ギッシングの弟たちはロンドン訪問時にネルと会えたが、妹たちや親友ロバーツは会わせてもらえなかった。母への手紙にもネルへの言及は一切ない。
 - 19 *Workers in the Dawn: A Novel*. 3 vols. London: Remington, 1880.
 - 20 ハリソン(Frederick Harrison, 1831-1923)はイギリスの法律家、哲学者、英国実証哲学協会会長(1880-1905)。実証哲学の主唱者として1893年に *Positivist Review* を創刊して社会改良を呼びかけた。著書に *The Meaning of History* (1862), *Order and Progress* (1874), *The Positivism* (1901), *John Ruskin* (1902) などがある。当時49歳だったハリソンは社会批評家としても主要な雑誌にたびたび寄稿していた。文学や雑誌の方面に顔が広く、マシュー・アーノルド(Matthew Arnold, 1822-88)をはじめとする多くの知人に『暁の労働者たち』を読むように勧めていた。ギッシングが彼と知己を得たのは1880年3月だが、4月16日には肉親のウィリアム(享年20歳)を結核で亡くしている。当時はネルも嗜血を繰り返しており、ギッシングは運命論的な考えに傾いていた。
 - 21 コント(Auguste Comte, 1798-1857)は実証主義哲学の提唱者であり社会学の祖。サンシモン(Saint-Simon, 1760-1825)の弟子で、フランス革命後の社会の理論づけとして独自の思想体系である実証哲学を築いた。神学的、形而上学的、実証科学的な三段階的社会進化の理論や、社会静学と社会動学よりなる社会学を考えた。
 - 22 モーリー(John Morley, 1838-1923)は英国の自由党政治家、伝記作家。政治方面ではアイルランド総督、インド総督、枢密院議長などの重責に着き、文学方面では *Fortnightly Review* と *Pall Mall Gazette* の急進的な編集者として名声を博した。
 - 23 ベルツ(Eduard Bertz, 1853-?)はポツダムに生まれ、ライプツィヒとチューリッゲンの大学で哲学と政治学を学び、活動的な社会主義者となった。鉄血宰相ビスマルク(Otto Bismarck, 1815-98)のドイツを逃れてパリとロンドンへ亡命し、知的な話し相手を求めるために出した1879年1月17日の新聞広告を通してギッシングと知り合った。その後、アメリカへ渡って農場

- を経営し、図書館司書になる。そして、ロンドンに戻って図書館員をした後、英語で書いた物語によって成功し、ポツダムに帰郷して定住する。代表的な小説は『幸福とグラス』(*Glück und Glas*, 1891)と『サビー二人の土地』(*Das Sabinergut*, 1891)。ギッシングが最後の16年間に月1回の割合でベルツに書き送った手紙は、彼の活動と思想を記録した貴重な資料である。
- 24 ロバーツ (Morley Roberts, 1857-1942) は頻繁に旅行して経験を積み、*Rachel Marr* (1903)をはじめとする多くの小説と、旅行記や生理学関係の本を書いた。彼のギッシング伝は人物名が変更されているが、それは当該人物からの訴訟を避けるためであった。手紙の引用における字句の変更などの問題点はあるが、ギッシングに関する多くの証拠を提供する重要な資料となっている。
- 25 *The Private Life of Henry Maitland*. London: Nash, 1912.
- 26 1881年7月、ギッシングはイースト・サセックス州南東岸の市 Hastings でネルのために部屋を借り、自分は8月に Gower Place の下宿へ移ったが、彼女は1ヶ月もしないうちに逃げ帰ってきた。その後、彼はロンドン南西部テムズ川南岸の Battersea にあった病人用の寄宿舎にネルを入れた。1週間15シリングの費用は彼の僅かな収入にとって大きな痛手であったが、彼はどうしても彼女と離れる必要があったのである。
- 27 *The Unclassed: A Novel*. 3 vols. London: Chapman & Hall, 1884.
- 28 メレディス (George Meredith, 1828-1909) は『現代の恋』(*Modern Love, and Poems of the English Roadside*, 1862) を出版した頃、チャップマン・アンド・ホール社の出版顧問となり、その職を1894年まで勤めた。難解な表現に満ちた彼の作品は広い読者層をつかめず、新聞雑誌への定期的な寄稿と出版社へ持ち込まれる原稿の審査が主な収入源であった。
- 29 1895年2月10日付けの手紙 (*Collected Letters* 5: 296)。
- 30 チェルシーに住んでいたギッシングは、弟アルジャーノンに宛てた1884年4月28日付けの手紙の中で、「昔の北西地区に、本当に自由奔放な生活ができるような、どこか St. John & Wood あたりに戻りたい」(*Collected Letters* 2: 211) と述べ、実際にリージェンツ・パーク近く (62 Milton Street) へ引っ越し、同年12月には公園南側の Clarence Gate 近く (7K Cornwall Residences) に移り、ここが彼のロンドンでの最も長い住まいとなった。
- 31 *Isabel Clarendon*. 2 vols. London: Chapman & Hall, 1885.
- 32 *A Life & Morning*. 2 vols. London: Smith, Elder, 1888.
- 33 *Demos: A Story of English Socialism*. 3 vols. London: Smith, Elder, 1886.
- 34 アルジャーノンに宛てた1885年10月31日付けの手紙 (*Collected Letters* 2: 360) を参照。
- 35 *Thyrza: A Tale*. 3 vols. London: Smith, Elder, 1887.
- 36 1888年2月の後半、ギッシングはイギリス海峡に臨む行楽地 (27 Brightland Road, Eastbourne) で気分転換をしていたが、その月の29日 (水曜日) の夕方に妻の死を伝える電報をもらい、翌3月1日にロンドンでロバーツと合流し、彼女の下宿 (16 Lucretia Street, Lower Marsh, Lambeth) へ向かった。
- 37 *The Nether World: A Novel*. 3 vols. London: Smith, Elder, 1889.
- 38 宿泊費節約のためにギッシングの伴をしたのはブリット (Ernst Konrad Plitt) という名前のドイツ人。この男は感受性や思いやりがなく、芸術や教養に関心のない、下層階級に特徴的な欠点を持っていた。スミス・エルダー社から受け取った『ネザー・ワールド』の著作権料150ポンドを旅費にあて、ギッシングはブリットと一緒に汽車でマルセイユまで行き、そこから船に乗っ

て1888年10月30日にナポリに着いた。その後は一人旅となり、11月30日にローマ、12月29日にフィレンツェ、翌年2月8日にヴェニスへ行った。そして26日にヴェニスを発ち、スイスとベルギー経由で3月1日にロンドンに帰り着いた。

39 *The Emancipated: A Novel*. 3 vols. London: Bentley, 1890.

40 “The Headmistress.” 結局この物語は完成しなかった。

41 例えば1890年7月15日には、「午前中に1ページ書いたが破棄せざるを得ず。午後は6ページ戻って、2ページ書き直し。非常に悲惨な気分。話を明確にするための苦勞で発狂せんばかり」と記している。

42 1890年9月6日付けのベルツへの手紙 (*Collected Letters* 4: 235) や1891年に出版された『新グラブ街』の第7章を参照。1890年のギッシングの年収は150ポンドにすぎなかった。

43 1890年9月24日、孤独に耐えられなくなったギッシングは、Marylebone Road に飛び出して最初に会った女性 (Edith Underwood) に声をかけたと言っているが、その日のギッシングの日記によれば、彼は Oxford Street のミュージック・ホールでイーディスに会ったようである。翌1891年2月25日、ギッシングは彼女と St. Pancras の戸籍登録事務所で結婚したが、その場にギッシング家の者は誰も同席していなかった。彼は妻と二人で、『新グラブ街』の版權に対してスミス・エルダー社から得た150ポンドをもとに借りた Exeter (イングランド南西部デヴォン州の州都) の住まいに、パディントン駅から汽車に乗って直行した。その年の12月10日に長男 (Walter Leonard) が、1896年1月20日に次男 (Alfred Charles) が生まれる。

44 『ペンデニス』 (*Pendennis*, 1849-50) は、母の盲目的な愛を受けて育った名家の一人息子アーサー・ペンデニス、父の死によって学校を中退し、恋愛や放蕩を繰り返しながら、最後は文筆家となって許婚と結ばれるまでの半生を描いた自伝的色彩に富む作品。作者自身の若い頃のボヘミアンぶりを髣髴させる主人公の恋愛と精神的遍歴を中心に、自己と現世とに満足するヴィクトリア朝に特有な青年の姿を描いている。『デイヴィッド・コパフィールド』 (*David Copperfield*, 1849-50) は、主人公デイヴィッドが父の死後に生を受けた瞬間から、悲惨な再婚をした母の死によって孤児となり、幾多もの辛い経験をしながら法律の仕事で身を立て、やがて小説家として成功するまで、その人間的成長の足跡が一人称の追憶記形式で鮮やかに描かれた自叙伝的小説。幼年期の無垢から青年期における実社会での経験を通して自己を発見するまでの過程を描いている点で、『ペンデニス』と同様に教養小説の流れを汲んでいる。

45 1878年の終わり頃、ギッシングは短期間ではあるが慈善病院の事務員として働いたことがある。

46 ロンドンに上京したばかりの貧乏なギッシングは、光熱費節約のために大英博物館の読書室で熱心に仕事をしていた。

47 当時の作家協会の機関誌 (*Author*) の第2巻第1号 (1891年6月1日発行) に掲載された編集者ベザント (Walter Besant, 1836-1901) 自身による書評。

48 1962年にボストンの Houghton Mifflin 社から出版された『新グラブ街』に付された編者 Irving Howe の序文。

(出典) Jacob Korg, “George Gissing,” *Dictionary of Literary Biography*, ed. Ira B. Nadel and William E. Fredeman (Detroit: Gale Research, 1983) 18: 104-09 <<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/gg-dlib.html>>.

(次号完結)